

特別レポート◆◇ 日本のがん患者が見た M.D.アンダーソン



たかゆうこ

私は、31歳の時、M.D.アンダーソンがんセンター(以下、MDA)で、乳がんステージ3Bと診断され、Dr.Feig (Surgeon)、Dr.Theriault (Oncologist)、Dr.Buchholz (Radiologist) のもとで、丸1年治療を受けました。抗がん剤治療(タキソール4クール、FEC4クール、ハーセプチン使用せず)を8ヶ月、温存にて手術を2回、放射線治療(50Gy)を25回受けました。その治療体験を以下に書きたいと思います。

たかゆうこさん。抗がん剤投与・手術終了後、髪の毛が少し生えてきたところ。写真は放射線治療中に、M.D.アンダーソンのアトリウム(中央大広間)にて、クリスマスの装飾をバックに写したものです。

1. 日本の医療機関との違いについて感じたこと

日本の医療とMDAの医療の一番の大きな違いは、日本では一人の医師が抗がん剤投与から手術までのすべてをこなしますが、MDAでは分野別に担当者が分業化されており、そのスペシャリストが該当する部門の治療を施すことです。わかりやすく説明すると、一人の患者のためにチームが編成され、その専門家集団によって適切な治療が進められるのです。

日本では診察の予約を入れていても、実際に診てもらえるまで何時間も待つのが当たり前で、やっと診察時間を迎えても、流れ作業的にさばかれているという感じがありました。しかし、MDAでは一人一人の患者に十分な診察時間が割り振られているので、日本の病院のように待たされることもなく、先生と納得のいくまでコミュニ



Clark Clinic(外来病棟)。M.D.アンダーソンがんセンターは、テキサス・メディカルセンターの中にあって、Alkek Hospital や Clark Clinic など、多数の施設から構成されています。

ケーションを取ることができました。おかげで、私を担当いただいたチームの先生方とは、信頼関係を築くことができ、常に前向きに治療に集中することができました。

特筆する点としては、医師のチョイスが可能だった点にあります。日本でも、最近ではセカンドオピニオンなどが普及してきたようですが、それでも同じ病院内で主治医を変えてもらうことは現状では難しいように思われます。ところが、MDAでは、病院の規模の違いもあるのかもしれませんが、診察を受けて医師と相性が合わないと感じた場合は、患者の希望でいくらかでも医師を変えることができます。日本では、「医者が上、患者が下」といった上下関係を感じることもありましたが、MDAでは「医者と患者は対等だ」という認識のもと、フレキシブルな対応が可能でした。命をかけた治療に、運悪く相性の悪い先生が担当になっても、日本では「変えてください」と言えない、これが現実だと思うのです。



たかゆうこさんを治療したDr. Barry Feig。彼は、M.D.アンダーソンがんセンター教授で、腫瘍外科医。写真は、2007年11月に千葉・幕張で開催されたThe 1st TeamOncology Workshopでの講演の様様。

幸いにして、私はメインで診ていただいた3人の先生方との相性がとても良く、変更を申し出る必要がなかったのですが、代診で診ていただいた中には合わない先生もいらっしゃいましたので、Dr. Feig、Dr. Theriault、Dr. Buchholzの3人の先生にご担当いただけたことは、本当にラッキーだったと思います。

医師一人の知識や経験で治療方針が決まり、医師と患者との信頼関係が築きにくい日本の医療体制とは異なり、アメリカMDAでは、信頼のおける医師と専門家によるチーム医療によって、不安や不信・ストレスを抱いたりすることなく、患者は安心して治療に専念することができるのではないのでしょうか。

2. 患者も、がん治療チームの一員であるという自覚

治療中に患者として気付いたことは、先生方だけでなく患者の私もまた、がん治療に携わるチームの一員だということです。どんな些細な質問でも丁寧に理解するまで答えてくださり、「患者に最善の治療を」と頑張っていたいるチームをリスペクトするためにも、そしてより良い治療を受けるためにも、患者である私自身が医者におんぶに抱っこではなく、自分が受けている治療を理解すべく勉強をして、チームの一員として自立する必要があると思いました。

日本の治療の場合は、入院後は看護師さんがつきっきりで何もかも世話をしてくれますが、MDAの場

合はカテーテルの消毒などといった簡単な医療行為も、講習やテストを経て全部患者自身で行わなくてはならないのです。私にとっては、誰かに頼って人任せにするのではなく、自分で何もかも理解して行動しなくてはいけないという状況のほうが性格に合っているのです。こういった点でもMDAと相性が良かったと思っています。



たかゆうこさんを治療したDr. R.L. Theriault。彼はM.D.アンダーソンの教授で、腫瘍内科医。写真は、千葉・幕張で開催されたThe 1st TeamOncology Workshopでの講演の様を撮影。

また、診察中は無料で通訳が付きますが、院内における診察以外の事務的なやり取りなどには、通訳はつきませんので、ある程度の英会話力は必要不可欠です。

3. 入院について

入院について説明しますと、1年間の治療において、私は一度も入院をしていません。乳がん手術後の当日でさえ、たった1泊の入院もできず、術後すぐに病院を出ることになりました。言ってみれば日帰りです。このような表現をすると、MDAが患者に冷たいように聞こえるかもしれませんが、これは医師の方針ではなく、現実問題としてベッドが常に足りない状態で重病患者に優先的にベッドが用意されるため、乳がんの外科手術程度では入院できないケースがほとんどのようです。

4. 治療費や、かかる費用について

費用についてですが、これだけの精鋭の医師たちを揃え、世界各国から患者を受け入れるためには仕方がないのかもしれませんが、そして単純に他の医療施設との比較はできませんが、アメリカMDAの医療費は、私の感覚では決してリーズナブルとはいえない金額でした。（金銭感覚は個人によって違いますので、あくまで私の場合です。）

また、私達の持っていた保険プランが最初にまとまったデポジット（保証金）を病院に支払わないといけないもので、それを支払わない限り治療を受けられないと言われたこともあり、なかなかシビアな現実でした。（米国の保険事情は日本の国民保険などと違い、持っている保険プランによってカバー率なども変わってきますので、個人個人の支払額等が人によって随分と変わってきます。）

（※編集部注：MDAはテキサス州の公立病院ですので、州の低所得住民の患者さんなどのために、医療費などをサポートする支援システムを別にまた持っています。）

また純粋な治療費用とは別に経費がかかったのは宿泊費用です。MDA に入院したことがないので入院費用との比較はできませんが、治療費以外のホテル代などにも相当な費用がかかりました。たまたま私達はダラスに住んでおりましたので、抗がん剤治療の時は3週間に一度MDAのあるヒューストンに行き、治療の間はホテルに滞在、治療が終わったらまたダラスに戻るという生活を8ヶ月繰り返していました。手術の時は日本からヘルプに来てくれた母親と夫と3人で3日間、また毎日放射線治療が行われる通院の時には、一人で2ヶ月近く、病院近隣のホテルに長期滞在していました。病院への通院手段については、ホテルからMDAにシャトルバスなどが出ていたりするのですが、長期滞在になるとスーパーへの買出しなど、車がないと生活できないのがとても不便でした。

5. 振り返ってみて

MDAでは最初の時点で、患者が治療に専念できるように、サポートをしてくれる人間が必ず最低一人は必要だと言われます。それぐらい、スケジュールの管理や、ホテルの手配、車の運転など、色々な雑務があり、夫と二人三脚でなければ、乗り越えられなかったように今でも思っています。

思いっただけでもこれだけの不便さや経済的な負担がありますが、それでもMDAの最先端の素晴らしい医療を受けるために、この努力や経費を惜しむことはできません。満足のいく治療を受けることができ、そして術後5年を経て、このように元気で生きていることに代えられるものはないと確信します。

6. 最後に

私はMDAという医療機関にめぐり合えたことで、幸いにもサバイバーとしてもうすぐ5年を迎えようとしています。辛く苦しい乳がんの闘病に打ち勝ってこれたのも、そして最後まで希望を失わなかったのも、信頼のおけるMDAと、私のために労を惜しまず注力くださった、先生はじめチームの皆さんのおかげです。私が今ある命を大切に思えること、健康な毎日が当たり前過ぎていくこと。それを与えてくださったMDAに対して、感謝の気持ちでいっぱいです。

(2008年5月執筆)

☆☆「乳がん記 in アメリカ」について☆☆

自分自身の記録を残すために、5年前のスケジュールを遡りながら治療記を書いています。もしご興味があれば、下記ブログもご覧下さい。

～乳がん記 in アメリカ～

<http://nyuganusa.blog33.fc2.com/>